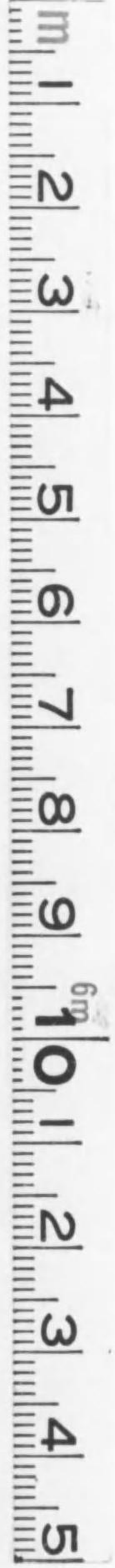


江戶
大真
閨房
情史

特 259

183



始



特 259
183



江戸
大奥

閨房情史

410



序

凡そ東西数千年の青史を緝けば、凡る事件の裏面には権力と女と酒が潜んで居る。之を究めずして其の真相を捉へる事は出来難い。

江戸幕府三百年、帝位の唯空しく高く、幕府専政の裡に、天下の財宝、美術、文化は悉く江戸城内に集つて、漸く浮化淫樂に傾き、延て大奥女流の勢力擴充と共に、其の専横は愈々激しく、遂に奢侈淫樂の墻庭と化したのである。

然るに、外は旗本八萬騎に護られ、内に宮仕への女性にすら其の情景を他に漏らさざる如く誓はしめた。大奥は全く神秘の境として知るを得なかつた。當時寺門静軒は「江戸繁昌記」を著して江戸お構の刑に遇ひ、柳亭種彦は「田舎源氏」を作つて絶版の處分を受け、大奥の内情を語るべき文献は極めて稀である。

本書は、一面江戸幕府の裏面史と云ふべきであつて、讀者は之によつて、江戸城大奥に潜む秘められたる出來事を知らるる

であらう。

昭和四年三月

編者識

目次

本序編

大奥正月の飾付

三ヶ日のお慰み

大奥の姫始め

くかくし藝やら踊三味線の大騒ぎ

年田カ的事

一ヶ年一度の胴上げーお芽出度やの音頭取り

大奥の御山抹

大奥の装飾

女役者は大好物

月光院の失行

二十六歳の若後室月光と

初將軍後見の間部詮房

繪島事件

ーお茶屋の逢引きー

白井主計と奥女中山吹の恋

大奥と御用商人

八代將軍吉山宗の大奥

月光院と吉山宗は如何

吉宗手代へ妻を所望す

十一代將軍家永齋の大奥

諸藩士風の墮落

墮胎流行時代——僧の墮落

長持の中に大奥の女中——

雜

編

將軍の服装

大奥女中の服装

少年家重の好色

吉田御殿

將軍は若いから室^{おや}さびしからう

秀忠の御台所

女中連に莫大お贈金

——鼻薬の利き方——

大奥女官の称呼と権力

櫻 見（重出）

嬉しい宿下り

見廻り

女中の悪戯

三代將軍家光の大奥

大奥女中の風儀紊乱

家光は女に掛けて素早い

四代將軍家綱の大奥

矢島局の専横

大奥風儀の素乱

御台所の御寐殿に忍ぶ男

五代將軍綱吉の大奥

元禄時代の梗概

君寵に誇るお傳の方

綱吉公と美少年

僧侶の破戒的行爲

六代將軍家宣の大奥

大奥風俗壞乱の基

家宣の好色

大奥寐泊り御免の男

序編

東西古今五千年の青史を仔細に調べて見ると、凡そ事件と名のつくもの、表面には、女と金力と権力とが潜んで居るのである。徳川氏三百年の政治の裏面には、大奥の女流が秘策を弄してゐたのである。大奥女流の研究を度外視しては、徳川氏三百年の歴史の真相を捉へる事は出来まい。

柳營大奥の主宰は、云ふ迄も赤く將軍の

奥方——御臺所であつた。大奥に於ける御臺所は、表向きに於ける將軍家の如くであつたので御威光は赫々たるものであつた。たまさかに、大先・老中が御臺所にお目通り仰せつけられ、終始拜伏したる儘のこと、御容貌を見上げ奉り、おまじと云ふことは、金輪際出来なかつたのである。御臺所の御威光はかく赫々たるものであつたが、歴代の將軍家は、御臺所の御許へ通はせらる、事少く、多くは御氣に入りの御中臈が御伽の御用を勤めて居たので、大奥實質際の権力は、將軍附の御中臈の手中にあつたのである。

御中臈には、將軍家附と御台所附の二派があつた。御台所附の御中臈は、自ら「お清」と稱して身の潔白を誇つてゐた。將軍家附の御中臈の如く、枕席に侍する女ではなからんと云ふ自負心からして、自ら「お清」と稱してゐたのである。御臺所附の御中臈は將軍家の御手がついた事は極めて少なく、先づ將軍家の御寵愛を忝みすることはありませんであつた。一面から見れば其の閃々の情を自ら慰めんが爲に、自ら「

お清」と稱して、高ぶつて居たのである。御台所
附の御中臈は、大奥で大いに威張つて居たが、實
際のカは、將軍家附の御中臈に及びなかつた。將
軍家附の御中臈は、御臺所に付き添ひて、何かと
御介添申上る上臈（老女）が、御年寄（大奥一
般の政務を司る）に屬して、其の監督を受け
てお事になつて居たが、將軍家の御側に奉
仕し、或者は、將軍家の枕席にも侍すること、
實際上の勢力は、想像以上に大きかつたのである。
一日の本は山石戸神樂の始より女ならは夜の

明けぬ國」のたとへが、今更ら乍ら強く鳴り
響くのである。

本 編

一 大奥正月の御飾り付

ちよつと考へると奥付府の大奥は正月はさそり立派な注連飾りで御山まきであらうと思ふがさうではなまい、至つて質素な飾りで御座敷と云ふ女中の出入口に松飾りが並ぶ通の如くに立つ、また七ツの口と云ふ通用口へも松を建るがけで外

に松飾りは一切ない、注連飾りと云ふは御臺所の御座の間の床へ並ぶ輪飾りが一つと御儀式に用ひる三宝鏡餅の台をひと二品へ注連飾りをする計りか外には一切ない、たゞ御座の間の床へ日の出に鶴を画した三幅對が掛る、中は日の出に波と鶴左右に松竹梅と言つたやうな物、置物は鶴亀と極つて居る、これは銅で出来て居る金銀の象嵌がある、御小座敷、御清の間の床の間のある所へは梅と松とが皆目出度の掛物か懸る、置物は蓬萊山とか高砂とか何れもお目出た

盡してある、

三ヶ日のお慰子

三ヶ日ともお召替の騒ぎばかりで實に隙か
を、夜に入れば古今集の歌かるた、女中の三
味線などを聞く事もある、が大ていは、元日は
何も出来ぬ事が多い。

二日は物事の初めと云ふのでお七日初めとしては色
紙へ新年の歌を書き、其から古今集か後拾遺

和歌集などを讀む、一枚ばかり讀む真似をする。
大奥では三ヶ日一切掃除を、福の神年の神と
違ひ出しては相成らぬと云ふ譯だ、さ小は二日は、
お掃除初めと云ふ譯でサし許り女中かする。

お裁初めと云ふのがある、是は御台所か將軍の
衣服を親ら裁つのであるが、呉服の間の女中より
出す織物をお年忌可りが選み御前へ裁臺に
のせて出し、素袍、大紋、類を千ヨイ、裁つ
真似をする、是か終ると御祝儀として女中へ
酒肴を下さる、是は呉服の間の女中一同十二

三人へ下さるが、密偵は他の女中を加へて飲みほしめる、何がきて女の事だから外に楽しみがない。

大奥の姫初め、隠し執りやら踊。

三味線の大騒ぎ

この日は實に大騒ぎをやる。御台さまは山にお覗きを云ふ譯で、女中の中で甚いのは比自執云がある、長唄、常盤津、義大夫、踊り、手品もあり、落語もある、藝人は至つて多し、この技藝

は中々断方を凌ぐほどの者も居る。

この夜は將軍始めて大奥へ寝る、之を姫始めと云ふ。

二日の御居所には画師に宝船を畫させたのを鳥の子紙の上へ重ね枕の上へ置く、枕下へは紙巻を一番画いたのを置く、床は長八尺、中五尺位の上敷宜しと云ふ厚サ七寸程のものを置く中に「ハンヤシ」が入てある、枕の方が少し高し、夜具はいろいろある、羽二重、白綾子もある、白地に赤く葵を染たものもあり、淺黄もある、枕は長枕で北枕の時は將

軍は右、御臺は左、東に向く時は將軍は左に寝る、其の外いろいろあるが餘り必要がないから略す。

年男の事

一ヶ年一度の胴上げにお目出たやの音頭取り

三々日の中に節分のある年もあり無い年もあるが、節分には式の豆蒔きがある、この豆蒔の役はもと老中がした、處がいつか女中が集って年男を胴上げする事が始つた、天下の執権が

女中の玩弄になつては妙であるから、後には御留守居の役人の中年年齢五十以上の者一人之を勤ある事にまつたのである

御留守居、古くは城代で、昔は重大な任であつた太平になつては御城内に属する取締、其の他の御用を勤むる様になつた守職である、五千石高で奥力十騎同心五十人所屬する五人が定員である。

節分の夜定刻に御年男に選ばれた御留守居は、長上下敷斗目で大奥へ出る、大奥を見る

のは、この年男丈で一切男子は大奥へは入れぬへ火
事の時、時は別だ、表使が出迎へてお年寄へ披露
する、其から、中老、若年寄をとりが案内して、御
座の間へ入り、着座して三宝へ載せた煎豆をつ
かみ壘の上へ「萬々盛」の三斗子を大きくまわす
其れから煎豆を攫んで大ききを声で「福は内」
「福は内」と呼びながら殿中の間毎く撒きあるく、
女中がゾロゾロ附いて歩く、お座敷敷で撒き終
つて豆を懐紙に包み女中へ渡し一禮して立ち
上るところを女中一同で引き捉へて胴上げをす

るので、女中が大勢かでするのだから一人の男で争
ふ事は出来ず、ソレがチヨイと古ふ譯ではな
い、一ヶ年向に一度ソレを楽みにしてやる、だ脚
臺所も脚腕になつてお笑になる、大奥は山崩る
る許りの大笑、この胴上げには音頭とリがあつ
て二三十人で男を捕へ仰向に寝せて一人が
起て声張りあげ

御世は目出たのこの君様よ

と唄ひ一同ついで

金の土ムラのくさるまでお目出たや

と同音にやつて持ち上る、また一人が
人金の土台はおろかな事よ

と唄ふ

石の土台の腐るまでお目出たや

是はこなたの大黒柱

とやらかす、何度とくくとやる

おから年男は堪らなり、這々の体で逃げ帰る。

其れから四日の弾きぞめ、是は三味線の弾き、
ぞめ、御簾中方御年始の登城の踊りの催し、
なごさまへ賑やかな事がある。

大奥の御寝

將軍が大奥へ御成りになつて御寝の節は御台
所着とは御中膳御小座敷へ出仕して此處を將軍を
御待ち申し俱に御寝になる。

扱て將軍は御鈴廊下より御鈴番の報せを聞き
にお成りになり、お小座敷を暫く御対話あり、
茶菓等を出す、酒宴を催すとは絶えぬ。

御台標と御座の時、御台所附の御年寄御中

萬が御次の間で御伽を勤め、お中膳と御座の
夜は將軍御の御年寄御中膳がお伽をする。
其の夜御中膳は総白無垢の服装で髪を櫛巻
にし、簪を殿前オニとなく、夜具や平常の衣裳
を御三方間に持たせて出る。

御座の節は御中膳二人宛御座所に入る、二人の
中御用の者と御添座の者とがある。夜五時
將軍の御成の前長島から御小座敷に至る間
御用の者は一間程先は立ち、御添座の者は一
間程後して静かに廊下を歩み行く、之に依つて

今夜は誰殿か御用に當つて、誰殿はお添座の番
かあると言ふ事が一月見こ知事か出来る。

二人がお小座敷に入ると、御年寄は御中膳の
髪を解いて之を梳めて次の間に下りお三の間の
女中に命じて、元の櫛巻に直し、座に戻り、御
成りを待つのである。夜具は御台所御座の時の
物と変りはない。

扱て將軍は中奥に、お添座の御中膳は右に將
軍に向つて卧し、御用の者は將軍の左に少く
お小座敷を敷き背を向けて卧す、何故に斯く

御用の御中臈を御座の間に置くかと云ふは之れ
御障懸動以末、この成規を定めたるので、不添條
の御中臈が、如何に媚を呈し、毒舌を逞ふす
る様、事ありあらず、人聞きがあつては流石に憚り
云ひ出し、蓋ぬ、將軍を以て、自ら過ちに遠ざ
かり、ある御仕組人にしてあらう、斯くて御添條
の御中臈は其の聖朝別席である夜御伽の御
年等に昨夜は打解けにて、斯々の御戯れがあ
り、又御用の御中臈は、是々々々お話を申し
上げ、その外は別條ないし目を申上るを例とする。

大奥の裝飾

御座敷の裝飾を悉く述べ立て、は限りがないから
御座の同じ御台所の居間と二つ文述べやう、外は
大同小異で、張付の画と木材等が違ふ迄の事だ、
御座の間の模様と云ふものは上段は三十曲且の高懸
縁りで、この一室は一尺ほど他の座敷より高し、正面
の床口は向奥行三尺床柱の檜の糸柱、違棚は黒
檀、袋戸をなし、敷居、鴨居は黒塗し、床柱も、

墨塗り、床の張付は金砂子ニ葉菱の散らし、
天井小壁皆同様の張付、下段は御鷹野の
様を極彩色で画いた唐紙を三方に建てる、天井
小壁は地に白に銀にて花唐草の模様、まづ斯うぢ
ふまゝである

即台所の常住、御休息の向上一段は三十疊敷、
二方の襖は、床、這棚あり床板は楓樹、張付は
地に水玉草の模様、襖は花菱形を七子へ置い
たもので紋散し、御化粧の間は金砂子に秋草の
模様。

湯殿は御上湯と呼ぶ六疊敷の一室がある、
張付は地に白の藍の雲形、東に戸棚、三方腰高の
障子、この處に衣服を脱ぐ、湯殿は間口二間
奥行二間半、四方「ハメ」総檜木の証造り、板の
間は檜の四寸程の厚板、風呂は白木の檜桶竹
「タガレ」黒塗りの△は、小桶が二、熱湯と冷水の桶
が別に二つある。

便所と御用所と云々、四疊半一間惣檜木造
り、三方「ハメ」中を仕切り、前の方は女中が
控へて居る所、其の一半即ち二疊敷の中央に

桐箱を置く白木造り、高サ三尺中一尺
五寸長二尺六寸と上の英窓に三角の穴がある。
冬期は、この窓に火鉢を入れ、夏は女中か團扇
で扇ぐ、まづ糸でお座敷はざつと済む。

女中連に莫大の贈金

自果樂の利キ方

大奥の女中と云ふものは甚だ虚榮心が強く、其の上
贅澤な生活を以て中老位になると十四五人もカは
使ふ女ばかり。部屋は五間も六間もあつて、五六萬石
の奥方と言つても及ぬ程である、時は町方より脚
狂言師と云ふ女役者と呼んで、部屋下せ居をさせ、
その女役者の中には、女装した男役者も這入つて来る

事がある、三保野を以て、内々然らざる様しみか、
長じて姉小路に覗き来たると云ふ説もある、然るに姉
小路も随分内々では種々の様しみをして居た、夫が
爲に金が要るので、衣服や道具には少しも不自由
が事いから及物等は奥向では余り喜ばぬ、食物の
珍らしいのと金である、金も廿五兩以下の金はい
けない、高橋は石流石に豪傑であるから金は随分
費った、三保野の祐筆をして居た筆野は云ふ
女は十七回に百二十兩と遣ったと云ふ、三保
野は餘程取らうとい、姉小路、是生、伊東、坂本

の手へ廻して金が三年の間に一萬兩位には成つて居た
不算の效能は次第々々と現れて、水産家ではさうい
運動とせぬと、烈公の御子七郎九郎一橋相續人
と云つた此事は内々本郷丹後守の丹後を折つたこと
言ふが、実は他に候補者もなし、將軍は何か一
烈公を喜ばせやうと云ふ御身へは浮んたからである、
さう致す中に是生、姉小路、不忠孫の幹旋で
將軍孫と石川御成と云ふ事に滞着けた、こゝは、
峰樹院孫へ御面會と云ふ名目である、其の席へ
烈公を呼ぶ御逢ひはさうと云ふ狂言の助書が

千ヤシと出来左、とうく其事が実行せらるゝ將軍と
烈公御對顔、モウ烈公の勢力は回復した、同く
亦く水戸家の内閣は更迭して高橋多一郎が内閣
書記官長に（奥祐筆頭取）大臣は皆王狗堂によ
り出右、同く烈公幕府の顧問もあつたから、
戸田銀二郎は老中には藤田虎之助（東湖）は側
用人、武田修理（耕雲齋）は若年寄、山岡
喜八郎は大目附と云ふ如くに天狗の世とあつた、
この七変化が婦人の力で、つたと言ふに云つては
女子も亦侮る可からおで兵らう。

幕府大奥の勢力の一斑は大略右の一事で全貌
を推想して誤りはないのである。

大奥女官の稱呼と権力

大奥の女官の名がまた面白い、一人として女山居りといふ名がある。朝廷では昔から典侍、内侍、掌侍をいふ定つて居たが徳川家ではさう云ふ役目はない、三代四代頃までは老女官の中藤官のいふ云ふ役目といふ年を取った婆さんを自然老女とか年寄とか呼ばれ、中年鳴を中老といふは普通の事で、ソレがとく

然るに如くに成つて五代頃から脚年寄、中年寄、御中藤、御中姓、御若舎あ釋、御錠口詰、御御筆頭、表使、御次頭、御祐筆、吳服の向ふといふ云々表方と同じ様な職名が出まは、二小文の女役人が大奥一切の事務雑事を取扱つて表（老中以下の彼方）に對しては對等の権を有し、年寄は老中と同格であつた、ソレ故に老中と年寄とは禮儀も同格であつた（老女の事）伊勢とんと呼んで少し頭を下小は老中と歌橋といふ呼んで同じ位に頭を下ゆる、このお年寄といふのが権高

て機柄を事は案に言語同断に尤もお年寄の上
上は上臈と云ふのがある、是は公家の姫君を以て
御台所へ侍りて來た女で大奥の政勢には餘り直
接し得ないからお年寄よりは権力が弱い、お年寄は
表の亮中と同じく政權を握つて居ると云ふものである
から馬鹿に感服了、是のお年寄が御台所、一身
に就て萬事の世話する同役七人ある、中々寄
が二人、御中老が八人、御茶會釋が五人、御小姓
二人、御坊主四人、表使七人、御祐筆頭二人、御
祐筆五人、御錠口七人、吳服の間頭一人、吳服

の間十人、御三の間一人、御座敷詰十人以上が御用
見之以上の役だ、此れが高寄官で、其上の上臈
年寄は親任官見たやうなもの其以下陪隸の女
まで総人員七千人位ある。

櫻見（重出）

弥生の春霞にお庭の花も綻いたと、御庭の春から
上甲お小ぼ、花見の目を定めて仰せいなさる。抑
櫻をこき交わす自然の彩色り、鶯鳥に笑けぬやう
着飾り、たいは春の女心、まこと禁慾の生活に虚けら
へ居る大奥の女官達が、おんがじし意匠を凝らした
服装に、せめても胸の悩をなぐさめんと、花見のお触れ

未だ同へぬ先から、春の衣の仕度に、夫、心を痛む
るも、無理からぬ事である。

花見は吹上御苑で行けり。番頭流番、伊賀
の若草は奥締目の前の目から新口御門の音人を
追ひ拂ひ、其の詰所を乗取り續て元大手（大田
道灌在城の頃の大手を櫻田御門から半藏門迄の中
安土堤の内にある）吹上門迄の詰所を立ち退かせ
當日己小等が伏って守護するのである。當日御台所
は乗物（赤塗下金着せの鉦を打ち飾りとす）を
釣らせ御褌お揃げにて中蔵がお手を取り御徒

歩下山室へ入脚釣橋を渡らせし龍見の脚茶屋
へ脚着あらせし。通帯は女中は襦かいらを着け
し、着けずい者も、お揃うけで尾従するの下あるか、
此の日に限り無禮脚免の成規であるから、脚供の列
に在り乍ら、またの者杯は口善サ悪ガなく、阿レ脚
覽遊ばせ能く咲きまゝなこい、ちい我れを忘れ、
大聲出でて勇おれものもあらは、咲きも疎らず散り
し始めおハテ能い眺めじやなア、と向板けな
声を出して、先に立つた女中に振返へし、こい
ふものもある。

龍見の脚茶屋を始めとして、其の外脚花の花に見え
隠小する茶屋が十四ヶ所、山室のものを合すれば二十三ヶ
所ある。お仲居お末を種々の道具類を此処
に運んで、表使、脚使着立會の上、脚年寄の指圓を
受けて、お次脚道具掛りの女中彼れ此れと飾り立
てる。此の外縮子に脚紋染抜の幔幕に花の香目
回ひ込ませて、芝生には此処彼処に薄縁を敷き詰
める。

扱當日は、未明から脚料理酒事を奥脚縁所から
運び、お渡りの数時同前には全に整へ了る。斯て

御台所の滝見御茶屋へ着せられ、その後、女中共し定座
めて、夫々自分の茶屋へ引籠る。

花見の宴には、かたぐ鳴物を禁ずる、従つて踊りに
も踊りに口三味線下あるが、却つて興のあるのである。
御台所が徐ろに御花を御散歩遊ばす時は花下の
仕笑ひ正に閑の時となる。酒を鰯腹飲み料理を
飽し、迄せしめて、ツブ六に酔ひ、肩を下り脚を投げ
出し、芝生にまゐりて唄かたあるば、狐奉りに負けて
衣を剥かれ襦袢一枚と着果てるともあり、笠取山の
向ふはサンザメく一群は柔い鬼に追りかま、蜘蛛

の子の散つては又取り滑りつ轉かつ新調の衣裳を
塵に塗れ水させ醒め後の介別を暫くお留守にして
騒ぐものもあれば、遣り羽子に敗北して強いて塗らる、
墨の化粧を泉水の氷鏡に洗ひ去り、本蔭で白
粉つけ撥ふるもあり、田楽の味噌を顔に塗り肌を
かき下滑稽踊を得意にやつてのける者もある。

茶屋々々には録田楽をいせ並べ女中衆が襦袢
かけに穿てる物を高ふ真似をする、外の茶屋の
女中共か、その店に束で、何々を下さいと、訪
ねると、賣渡す真似をする。

何れも、一年一度の毎禮の事であるから、採らる趣向
を凝らし、花も忘れ、さへおめく採は、下々の花見
と差がなない。

嬉し宿下り

御上臈、御年寄、中年寄、御暮舎釋、御中臈、
御小姓、表使、御鏡口番、御坊主等を除き御
次以下の者は年々の春先きに、御年寄の許を
得て宿下りをす。宿下りの規定は御奉公に召
し出さ小から三年目に始めて六日、六至日に十二日、
九年目に十六日の暇を賜はる、以後何々年勤然、

けし十六日である。叔暇の頼滞りなく済んで、明日は三年月不親兄弟に面會する嬉しき如何ばかりである。年の内には来年と教へ、月の前には、來月と教へ、一日々々と指折りなら月日を縮めて日と迫水が、夜も現に過し、愈々明日と云ふ今日は心もまいらた、物に手につかぬ有様か思ひやれる。

鶯ふ雛の声に嬉し、此の日を迎へて、心せわしく、世話を親の居間に至って暫しの暇乞すは、世話親は客を汝め、四隣で誓紙の通り、奥向の事、勤向の事、他人に申すに及ばず、親兄弟たりと深く他言を憚る

こと、よし忘小はすまじ、確と心して、此と下等々に論ずるを希とす。

いさ立出るとすれば、合部屋の者は夫水くぐに暇乞して髪鏡を直してやるものもあり、衣類の襟を直すもあり、兩隣の者は廊下迄出て暇乞して立別れると、是れから召使のタモン、ゴザイ(長向の召使男)各一人先宿元からの迎ひに付深ひ幾多の思ひ重なり城外に立ち出たりは袂にける春風がいと心地よい。生家を出て三四月の宿下りに家はナ水は、見了物毎になつかしく、親兄弟は、何処の姫御前かと思擬

ふ計り藩長に母を珍らしうに、見せしる。
挨拶も終つて扱て何から先に話すべき、伺ふべき事
も後先にする。一刻も千金に値する六日の中、此の日
一日は写すともなく過ぎ、翌日は親子連れ水立って
親類廻り、夫れから、深草の觀音採に詣り、何時
来てもかぬ賑ひに餘れを忘れず。平常廊下の唯中
を突初して、歩んを鹿をその儘、紺トサ張りの日傘
を翳して、人込みの中をツンと澄して歩み行く姿を、
母親の後ろから注意すれば、心付つて急に形を變へ
る様子もおかしい。

嬉し、日も暮しの孫おきて、六日目の昼過ぎる頃、
ゴサイの迎いに是非なく、親、足跡に暇乞ひして、家を
出れば、又三年は見るこゝも出来ず、ある。
家に帰らぬ六日前の日が、またもしいであらう。

見廻り

御老中廻りと云って毎月一度づつ、御老中一か
大奥を見廻るこゝがある。大概役所の退けかけ
に立寄りのを例へ、一人を乗る事とあるは、三四人
同伴の事とある。此の時は凡て表から其の旨
御汝指があり、お三の向の女中が曰く今日は御
老中廻りがあるかと詰所々々に触れ廻るから

皆達んでゐる。セツの大敷を相圓に添着御錠口
外に居並ひ、脚入りと云ふ注進に連れ御用人着
の頭が御慶敷に出て案内申上る。添着附々添ひ
の上御錠口にも御任着表使、御若舎釋等
が案内して、お小座敷へ上様の御座所へ入つて着
席すると將軍附のお年寄、御中年寄が出て挨拶
して茶菓等を出す。暫く對話畢の後御老中一
は直ぐ引き返へす。要するに、御老中廻りとは
即ち御小座敷檢合の事である。
御老中阿部伴勢殿は年若く好男子であつた

から、奥向き下は、その換分の時を待ち兼中、阿部殿が来ると云ふことを聞くと、その刻限には皆長局から出て、明るの間に潜み、障子や襖の透向から、竝に覗いて、従小此小評し合ふ者もあれば、中には、部屋着や簪へ阿部の脚紋の鷹の羽を付け、獨り樂しまだものも多かつたさうである。

御老中廻りの外に御留守居廻りとなって、御留守居三日に一度づつ、大奥を見廻ることがある。この時は長局前の廊下を巡視する。漆箱が案内に立つて行く御老中廻りの時と違ひ、此の

時は、女中達は御留守居を敬はず、反つて侮つて弄む物とする。夏は女中二人を入浴して、時を故臺に湯殿の口を明け放し、御留守居は已むなく、顔を見せ通る有様である。

阿部殿に對しては、年々、眼を見せ、御留守居は、女中自ら見せやうとする。女中男中は、さういふ下

女中の悪戯

三百六十五日を三ヶ重ねて僅か五日の宿入り、
芝居見物や御代参の供廻りを高く見積つて
年に十日、三年に三十日の遊山日とし、之に宿入り
の五日を加へて、三十五日を三年一千八十日かき差
引りて、サツト一千四十五日の其の向は廣いと言つても、
一時間には歩きでぬをい奥御殿を一日廻りて、

いと云つても、高が亦垂ゆるみをサツと擲りて立廻り
主小の用は十カに足るべし仕事に服して居るの
ある。春の日長は、秋の夜長に、笠の種を替りたり
悪戯をなすさみとするのは、やむを得ぬ事である。

奥庭の降り積つた雪を拂ふ為め、お仲五郎やお末
等が足袋蹴足を掻きよせ下廻りを、下田刀が末
で持ち運ぶのであるが此の時は添着の者が立ち會
ふのを創とする。添着はいつもお末お末に手取り足
取り雪の中に衝き倒され、雪圍ゆきまわを投げつけられる
こともあるが、眞赤になつて怒る譯にも行かぬから

長崎に上つて、畏つて居る様は滑稽である。

長崎に上つて出道を失つた譯者が、行き合ふ女
中に思合はると、この先に辻番があるから行つて所まで
水を運ぶ、言ふ

いかに滑稽で利口ぶつた不次頭を困らせやうと
鄭重に包んだ重箱に、見よといまけい物杯と大
水で贈る二とがある。愛ヶヶ水は後の仇かをそら
ふとい、愛ヶヶ水は置き處がない、さりごと人目があつた
減多に捨ても出来ず、仕方なく手輕りに受けけ
返禮には疑やう菓子やうを贈つたのである。

数へ立てると斯様を悪戯の数には盡す所を知
るのである。

三代將軍家光の大奥

大奥女中の風儀紊乱

大奥に居る何千を以て数ふべき女達は男知らず
である。大奥に上つたが最後、死ぬ迄男知らず通
さねはなすなかつた。これは彼女等にとって、耐へ難き
苦痛の種となつた。大奥の女中は將軍家の后
寵を得て、若様を御生みすることが、唯一の理想で

あつたが、侍女となり得るものは百人一人二人と云ふ
有様で、多量の者は、空閑の味と泣いたのである。

三代將軍の晩年から四代將軍の始めへかけて、
大奥の風は豪華に傾いて来た。夫れと同時に風
儀が乱れて来た。はては、長持の中へ男を入れて、品
物を運ぶが如く見せかけて、大奥へ引き入れ、人知れぬ
不義の快楽に耽るものを生ずるに至つた。

この秋暮れ、明暦三年の大火で、大奥の御大
上の御り姿見えしは、この大火以後、御幼少の最
細公が、焼跡を御巡視に立ち、大奥長局の

當りに、見知らぬ男の死骸がこもがって来た。

聰明なる水綱公は

誰れかある。ニルに犬の死骸あり。取すまよ。

と即命じにたり、深し脚註儀をなされず、王の儘
に置くカ水、後刻脚老中を脚呼出にたり、

我水印さだ故に、内外の者、之をよき、レほけ
或は遊藝に耽り、はせは、いまはしき振舞を
なすに聞けり。言語同断の至りなり。

今後此ま、には、おくまじいぞ。

此白よきやうに計らへ

と仰せ出された。老中共、舌をまいて、公の脚聰
明に驚き奉ったと云ひ傳へられ居る。

家光は女に掛けては素早い

元來家光は女にかけは随分素早い人で、伊
勢の守治に正慶院と云ふ尼寺がある。寺格は
高し寺下、毎年正月には院主の尼が江戸へ下って、
年頭の脚祝儀を申上る。此の時、独禮を將軍

に不目見えをする。三代将軍が其の尼を見つゝ
年頃二十一ニ歳下金襴の袈裟に紫の衣、画に
かいた様に美しい上に、是がまた至て美人であつ
たから、将軍劍の好^{おき}心を起して思召がある
から正慶院は江戸に滞在せしめと云ふ會だ。寺
社奉行の吃驚せしめらう、ソコで噂が立つた、尼
が懐妊したと云ふ説がある、この尼が長く江戸に
居たのは事實である。

二人を筆法であるから、お光を見て、あの女を
予に美水と云ふ御注文。春日の事だから不目見え

云ふ昔がない。十五の年にお中臈になつてお玉の
局と稱し、殊の外の御寵愛、廿二歳の時正保二
年正月八日に男の子を産んだ。二子を徳松君と
云ふ、第四着目の子である。後に五代将軍綱吉
公と云ふのが、此のお玉の局の所生である。已に男
子出生しなるとお玉どの、身分の取扱が狂了。
親へは公然御手當がある。處が父は京都附近
の百姓下太郎兵衛と云ふ至つて貧しい男、毎
日土大根を擔いで大根買ひておし水やを、大根
いらんが由い賣つて歩く。

娘は公方様のお妾にござり、初めは立身信不通。と
ころが若君御誕生とあり、所司代板倉周防の守
より内々身元の取調と来ながら、サア太郎兵衛警
い右。この太郎兵衛の事を徳川系圖では本莊
宮内少輔宗利と書いてある。以貴小侍には北
七路太郎兵衛藤原宗正とある。是れ比曾後
に斯く言ふ立派を身分せられたので、初めは太振
高貞の太郎兵衛、名字とをい程の下賤のとの
であつた。

四代將軍家綱の大奥

矢島馬の事情一

大奥風儀の紊乱

三代將軍家光公薨去の後、家綱公は御本
丸へ移られたので、御生母堀山氏より御年々へ移られた。
家光公の大奥を支配したお萬の方は、世に
て常光院と辨したが、しばらく矢島の馬の後見と
ごとき意味で大奥に止った。やがてお萬の方より大奥

を去り、増山氏は病身故、大奥の夫島局に仰せつけられたので、局の権勢は、其の春日局と云はれ左程左水勢と云はれた。

山本綱公は、將軍職を嗣がせよと、願ひ幼少であつたので、政務は保科隆延・正之、井伊掃部頭直孝、酒井讃岐守忠勝、松平式部大輔忠次等が司り、大奥は久世慶之が監目と云はれた。上程の御教育の一切は御乳母佐島局が司り、絶對に他人の干渉を許さなかつた。この頃大奥では、公の御慰女にかゝりて、能樂、狂言づく

し等が、屢々催された。

山本綱公は飼鳥を好まされ、園中には、いろいろの鳥が所せまき迄飼ひ養はれつゝおられた。或る時公は秋蔵の丹頂の鶴が二羽斃死したので「是れ丹頂の鶴を居出せ」との最命令であつたが、折返し其の事とて、代りの鶴が手に入らなかつたので慶之朝臣は、其旨言上したが、公には御用き入りをさしぬ。慶之朝臣は、困りはて、佐島の局に取り寄しを依頼した。この時、佐島の局は朝臣の申入を承引せず。

世にまき島をば致仕方をケル如、現にあり
島ありに、差上げおるは心得難い。伊豆見
上様は御幼少をば、公命を軽んおるが
政である。

ときめつけられて、廣之朝臣も一本矢より松前公
塵に命じて、松前領から二羽の丹頂の鶴を
取よせむ。

老中の者は、左島島の城まゝに固りて、

御幼少の折は、御取扱は女中をば巫女とす
成、小早や御年比十二にまゝに結ぶ上は

御表へ出下させられ、女中の手を盗取らるること然る
べし

と決議して、この旨を左島の島に通告した。(承
應二年)この時島は太い腹を立て、

上様が御虚弱にわたらせらるゝ事は、各、方御
存知の通り下ある。我ら十二年間所倒に付き
まぬいせてさへ、御虚弱にわたらせらるゝ、ものを女
中の手を齧れて、御側衆、御百姓衆の手にて
御介抱申上げんこと心とまじ。

と主張して承引しむ。結局、公には表御所

に御座あると云ふ名義文で、御年十五迄は、大
奥に御座をされたのであった。老中の決議も、高の
一言に敵かたかつたのである。女が御表御住居を
なされるやうに存つたのは、御年十五の時（明暦元年）
からであった。斯く公には、御表御住居となつても
大奥一切の事は、高が司り、何かにつけば老中も
若しめた。

老中の人々は、高の権勢を抑へる一手段として、
急ぎ、御台所を御迎へ申す決議をし、康福門
院の御贄殿を得て、連時贄行と云ふ事にすむ、
二の事に就ては、さすがの高の反対はしなかつた。
二の頃大奥の風儀は極度に紊亂し、女中達は、
あやしの男を殿中へ引き入るゝ不義の性業に耽つ
たのである。

御臺所の御寢殿に忍ぶ男刀

明暦三年七月十日家綱公御婚禮日出度く
相濟申、翌萬治二年九月御本丸御薨御請
成就して、下の番新左衛門御殿へ御移りなされた。

二に不思議なる事件の突度一匹。或る日の
事御臺所が、御莊殿にははしまし、ふと不庭の
方を御覽へたまると、あやしの男が、御縁の緞帳を
あけて内を覗いて居る。御臺所は、大りに驚き、この
事上臆衆に告げられたので、大騒ぎとなった。百
方手をつくして捜し廻り、御入側の椽の下にかくして
居た所をからめとった。制規嚴重なる御臺所の
御座所近く迄あやしの男が、忍か込まとは、前代
未聞の出来事なので、幕府當局の狼狽は一通
りでたかつたが、この事を表向きには、及んで

奥女中の風儀總察をさうけ出す様をいっただ
表沙汰にはせず、内々に町奉行所へ引きわた
て成敗してしまつた。大奥始め、御門御門の番人
へは、葛西の百姓が道に迷ひ、御椽下をうろたへ
て居たが故町奉行所へ引渡したのである。と
申しふとめて、凡そを有耶無耶にしてしまつた。

御臺所は賢徳のほま小高く、久世廣之は先
君より命ぜられて、御側用人となつた人である。重
く御用をなされたので、廣之は、大奥一般から重んじられ
た奥と老中の間に居て政局を円滑に處理する事が

出来た。御台所は御輿の後常に御健康すく小ぢ
夫人とこの御勤めは、かすい難かつた。御台所は、

紙は伏見家の女、將軍承の御台所は、下々の者
に手をいふ小ぢせ難し。

と仰せられて、興葉の者に脚脈を脚とらせにならなかつ
た。興葉の者は、御台所の脚脈の所に糸を結かへ
て、糸によって脚脈のありさまを拜して見たのである。乳
癌で脚かゝるになつたのであるが、この時には、興葉の者
に、拜診を許さず、上臈をこゝ容態をへたへて、薬を
調合せしめ入らしたのである。

紙らは麓外の者に目通りを許さぬ習ひである。
たとへ乳癌をとりて、下々の者に肌を見せる事
は出来難い。其上乳癌は不治の病と聞く
からは、腫物見せられはして、全治すべしと思
はれむ、もし全治する程を見せずとも自然に
をほすべし。

と仰せられて、脚かゝるにやうな興葉をこゝ脚身体
に手をいふ小ぢせ難はなかつた。

五代將軍綱吉の大奥

元禄時代の概観

五代將軍綱吉公は、征夷大將軍となりや、大老酒井忠清を斥け、堀田一俊を登庸して善政を行つたので、名后と仰がれた。この間に貞保元年、正俊が殿中で刺客の手に殺されて以来、日増に政治は悪化し、柳澤吉保を登庸するに

及び、所謂元禄時代の暴政とあり、是亦后とてそのそしりを受くるに至つた。綱吉公の暴政を生んだ原因はいづくであらうか。之を述べるに大奥である。五代將軍の大奥程、錯雑紛乱を極めたその女は、五代將軍の大奥は迷宮である。將軍と老中との間に居て、政令を調停すべき御側御用人が大奥の女流と手を結んで、老中より実権をうばつて許さずには政治を生み出したのである。五代將軍の大奥を歴史的に考察し、其の真相を吐露するに非んば、到底元禄時代の歴史を語ることは

は出来をい。

元禄時代は文化——藝術の上から見れば最も華やかで時代である。豊太閤の桃山時代を秋の紅葉にたとへんが、家康より家綱、述の四代は、秋の嵐吹きまさぶる最たる如く凋たたるものであった。五代將軍の元禄時代は、満月荒涼たる冬すぎで、陽春まさに来りて墨堤の桜花が一時に咲き揃った時である。繪画に彫刻に、織物に、文政子に、藝術と云ふ藝術は進歩の絶頂に達し、之りを後世に譲つてゐる。春は花、秋は紅葉、夏は

川涼子、冬は雪見と人々皆歡樂に耽り天下は太平であった。さはまへ、天下の民の大半は、元禄時代の幕政に苦しみたる下である。幕政の源は大奥に在る。

君寵に誇るお傳の方

花飛か蝶舞けいと人愁へず、水殿雲閣
別に春をおき、曉日粧ひを千騎の女、紅唇は
翠、黛色を混へ、土々蘭鹿茸の松が香や、桃と

櫻もとこへた、花を見せたる大江戸の、時代を遷りさかんなる。さこそ元禄將軍の寵愛せし、女性三千の若色のうち、第一の御寵愛は、不中満お傳の方にふけられぬ。

お傳の方は微賤の家に生れ、父は小谷権兵衛とて、黒鉄の者である。黒鉄の者とは即城内を掃除する軽き者の總稱である。お傳の方十二才の時大奥へ召され、御湯殿の事をつとめて居た。其のうち公の御目にとまり、召し出されて公の御附となり、一通りまいぬ御寵愛蒙った、公の御側

を齎られたこと奇く、公が御謡を遊ばす時には、いつしお鼓を打つて御相手をしな。

公が將軍と奉せ給ひて後は、江戶城の大奥に於て、大奥一切の切盛をしな。け小い、お傳の方は、かく権勢ある地位にのぼったけれども、いさかも騒々心なく、いつ、まやかかに御勤めしなため、桂昌院殿及御書所からの御うけしよかったのであつた。

公は御舟遊びをいなく好ませ給ひ、吹上御花の御池に舟を浮べさせ給ひしことは恰かも目録

の如くであつた。御舟遊びの折には、いつと御機嫌
うらげしく、一さし舞をお舞ひをさせし。其の都度
お傳の方はお鼓を仰せつけらるゝを倒し給へ。公は
片時の間もお傳の方を齒向し給はず、またとや
く寵愛をなす。

時に英一蝶と云ふ画工が當世百美人と題
して、其の頃名高い美人を画いた。一蝶は古騰
不敵の男で、誰れかかると云ふを、お傳の方御
舟遊びの圖を画いて、百美人の中に入れた。元より
お傳の方と名はさ、なにか、このこと公儀の目には止り

「公儀をば、かゝる條曲事なう。レと云ふので、流
罪仰せつけらるゝ仕舞つた。

お傳の方の姉は、妹の光り下、館林の永を牧
野備後守成貞朝臣の養女と云ふ名義で、紅白
淡路の守成の室となつて世に時めいた。又お
傳の方の親父小岩権兵衛は三千石を賜り旗本
に列せられた。

細吉公と美少年

公は青年、頃男色に耽った事がある。戦國の世は、男色の盛んに行儀古時代であるが、其の若衆を愛けて、此の頃女社會一般に男色が流行した。土奥の奥阿比所で美少年を愛する。不傳の方が甚長を生んでから後でさへ、尚美少年を愛する事はあやめに事なかつた。

公の男色癖性となつた少年の内は、小川松榮と

云ふ者が居た。松榮は將軍から御内意を承けて、下で始め、輕き御家人能役者に至る迄美少年を愛さつて、之を桐の向に伺候せしめた。松榮は能樂道堪能の人間で、立ち方から、雛子の事を迷一通りわきまへて居たので、其の美少年に稽古をさせ、美少年能樂を公に御覽へさせた。將軍が能に御二方にやつて居るので、諸大名も皆、能樂の稽古をした。其の風はやがて下々に迄及び、三郡の町人らの中には、舞臺をいへて（内々に能樂に耽る者ありあつた。

僧侶の破戒的行爲

喜智姫即早世の後、御母公は申すに及ばず大奥全体が迷信に陥つた。以前から迷信に陥つて居たのが、夫水が益、淫くつたのだ。喜智人の娘は眞言の坊主達で、禁葷を極めた生活をする事が出来た。僧侶の出家者、寺領の墮失、其に前代未聞のありませであつた。

御母公の御宗旨である京都智恩院住持を

帝中紫衣大僧正と、公祖法然上人に圓光大師蹄を送つた如きは其の一創である。

御母公には元禄十四年四月五日に甘藷田川下御舟遊か、五月六日には王子権現、箱荷社参拜をなす、護持院隆光、護国寺快意が御遊いの御相手をした。この年九月京都嵯峨清凉寺釈迦佛開帳と江戸へ来た時には、彼二僧の執成に依つて、一夜大奥に御泊めになつた。此の時二僧は大奥に泊つた。この後は僧侶の大奥に泊る事は屢々で、盛んに大奥の風俗を乱し

た。

大奥の女中は思ひくりに、聖天、観音、毘沙門、弁
天など、信仰にかこつけて、毎日代り代りに多く詣
に出かけ、はては、年若き僧侶共と不義の契りをも
結ぶに至つた。護持院も護国寺も僧侶の密會
所と化してしまつた。世も末世をうか哉。

女中衆には懐妊する者もあつたが、クダくは医師に
頼んで、薬を服し、墮胎させた。中には、さる事と
して兼ねて居る向は、つひには隠し切小を、身の振り
方に困つて、護持院方丈の後の池へ身を投げて

死んだものもあつた。享保二年、護持院を護
国寺の側へ脚移しになつた時、大池の水を神田
橋の堰へ集め、ナルで、埋め立てをしたが、池の底からは、
十餘人の骸骨があらはれ、其あたりには、長さ一丈の程に
なつた女の髪の毛があつたとおふことだ。桶池の底には、
鮫の殻、魚の骨が、うづ高くなつておると云ふことであ
る。こゝは毒言の間に、脚所禱所の僧侶達が酒
池因林の快を貪つた事を物録したものである。大奥
こそ、佛敎帰依の結果、さらでに、男こひき
脚殿女中と、女こひき僧侶の間に、不義の契り

が取かかされるに至ったのである。

公も佛教に淫して、上野御門主を始め、護持院、護國寺、靈雲寺、大護院をも折じられた。御話相手となされ、御自身能をまわして見せられた。上、着物華装へ了事して度々であった。

六代將軍家宣の大奥

大奥風俗壞亂の基

新井白石が、京都へ御即位式拜見に出るに留年中、林信篤は、毎月六の日に登城して御前に於て御講釋申上る事になられた。信篤はこの機を利用して、公の御機嫌にかまひ、大奥の趣心を得やうと考へた。丁度此頃白石は、大奥

直傳の有職故實を鼻案にかけて、高慢なる振舞が
あつたので、大奥女流の嫉妬を授けてみた。

或る時、信篤が請義を了へて、退出せんとす
と、公は、

漢土歴代の后主たりて、女樂を疏ぶは、亡國の后
なりと聞くと、去乍ら樂人で淫せよとの戒を有り
なほ、必お亡國の具にもあらざるべし、先づ
亡國をなぬ后主もあらんと思ふは如何に
と御尋ねになられた。信篤は、こゝを許り

女樂を御尋ねし亡國の具に非ざるは、上意の通り

に候。誠に之を疏か給ふ后主の心はあり。ま
しくは重ねて上覽に呈し奉らえ。

と申し御前を退き、漢土固以未女樂の治筆と、其
后主の治績とを記して一巻とし、梓野信常を以て水
は傳ふる唐玄宗風流障の圖を寫さしめて、これを公
へ奉つた。公は、これを御覽になつて殊の外御喜ば
にやうな。信篤の策はコンマの的中した。女中の
輩は、この風流障に感心し、各々心を演じて春の
遊かに用ゐると、内々其の備しを計画した。これを
奈因となつて、大奥の風俗は壊乱するのちある。これ

共、その頃、鍋松居脚不削と云う、この備は中
止と云う。鍋松居の此病氣は幸にして全快し
たが、この時脚氣を調合したのは大奥の医師下
多、表医師の奥山交竹院と、町匠村上養順
であった。この功により、交竹院廿二百俵即四思、
村上養順には時服五重、白銀五十枚を下さ
た。

若居の脚病氣を全快させた功に依り、交竹
院は大奥、特に左京の方から信任された。それよ
り後交竹院はしげくと大奥へ出入り、女中衆の

風俗壞乱の媒介をなすに至った。

家宣の好色

大代家宣は至って女好きの将軍で、内寵の美人
百を以て数ふと三玉外記にあるから大層な事であ
った。譯山美人を集めて晝は吹上の御座
で船遊かをしたり、夕の宴遊會み右様を事を
し、百數十人なる女評し、其の中唯一人お氣
にたりの同部越前守詮房が加つて居た。

此の誅前守は誅前鯖江の城主五島石岡
部下總守の先祖であるが、この人の事と一通り言
けねばなるまい。

同部は能役者の傳である。彼は至つて美男
下、其の上は恰似である。家宣がまだ軍府宰相
と去つて、摺田の屋敷に居たころ、父の西田喜兵衛
と去つて、能役者と共に屋敷へ出て能を演じて、
ソレが十三四才の時、家宣甚だ喜に入つて、児
小姓の掬に召使つた。實は男色の關係がある。
此の時西田を改めて同部を京と云ふ名に改めた。

其の後宮内 名を改め、次第に信用されて軍
府家・執事・用人と成り、家宣が世子と成つて
西丸へ移つた時、誅前の守と成り、從五位下
誅太夫に任じ、廊下番の頭と言ふ名儀に
けられ、此の男は内部の事から外部の事迄悉く
與つて殊に奥向き、お妾様と同する事は皆同
部の取扱で美人を探し進める。素直好色
第一の家宣、同部を天竺同唯一人と信用して
ゐる。新井白石等も同部の脚落を蒙つて
居るから、同部を褒めてゐる。二つ云ふ所様を

非常の推挙を膺して居り、余りから余り三人も召出されて、皆従五位詔大夫、同部はトシク、拍子下大者となつた。

蘇前守初め出た時は百石、二年上つて四百石、其翌年七百石、西丸へ御供した時千五百石となり、直ぐまた千五百石加増下三千石、其翌年は七千石加増で一萬石の太夫となり。この時は若年寄格側用人となり、名義、ふまけに従四位下に叙せられた。其の翌年また一萬石加増、二年上つてまた一萬石

家宣将軍になつた時は侍従に任じ、また二年経つと上州高崎の城主で五萬石となり、能後者から出て五百石八百石に上り、右は五代の時、いよいよあつたが、五萬石の太夫に上つたのは徳川初つて以来、この人許りである。

大奥撥泊り御免の男

同部は吾屋敷もあり、家もより、家来も、降山あふが、吾家へ歸す事は一箇年に僅

の救日に遇き。いづれ大奥に在り泊りして居る。只餘泊り許りては不い。誰れも好き女子を愛せと云ふ特人未である。それ故此の人は本妻もまた水は立女もない。大奥の女は孫らず吾妻である。太宰春其室か

詮房社にして妻を娶らず亦妾を蓄へず日夜王宮に在り時に一日は洗滌を賜りて而して私邸に帰り其の家事を觀る所也。王後宮に命じて女の可なる者を以て枕席を進めしむ (モト漢文)

とある、これで分かるのである。こんな關係であるから、あるべからざる様子を醜聞が漏れ出すと自然と古けぬはさるぬ。

女役者は大好物

大奥下甚居興行と云ふ體で狂言作者中村清五郎の語るところを以て此の以前御代(六代時)には大奥には芝居狂言の御催し度々あり初めは菊下小左衛門を御懸見にすむと云ふ後

には、新正に狂言を任組子並上々べしとの御内奉
で、私度には御書三指へ差上げしとある。
一筋の細うしと云ふものを思ふと、随分盛んにやつた
ものだ、一役者から断方、振付等まで、一切女で
其人數百七八十人程、皆駕籠か脚燈前から
右奥へ通す。其中には女の装束かいた男も多數
交つて老女中も、さう一部屋へ五日も六日も泊り
込む者ありしとある。二ホを大概分るで有らう。
二人を事として奥女中に役者買を教へた
から繪島一件の騒動が出来た。さう大抵の脚燈女

の中の子供のある人丈を云へば、四人ある、御台所
にも五人、其外は女役者もあり、脚燈元もあり
中老もあり、おけし居もありと云ふ次第で列
傳でも書のかうものなり大層な紙教を費す、又
ねさう詳しくは判りし、ない。

月光院の失行

大宮の粉黛顔色を、三千の寵愛一身にあり
と白樂天が揚貴妃を形容し、石が太代將軍

の妻妾左近の方も室に其寵は太政を傾けるの
勢ひであつた。この人は美人の上に才氣も亦從
の婦人の類はまい、近衛を儒者等が月光院
は即ち夫人なりとも、まゝに居る位だから其の利
口に立廻つて世上の眼を眩しむ處はすこいもので
ある。さりとて、悪不奸智のあつた人なりやまい、
若後家にはあり勝ちの先行が多いため、其の遺
り口が平氏をまじり交である。老女松島が後春
を買として、三木が経理する時、秋元但馬守が處
分は、これら同意を同じふ處、月光夫人は右様

を不行跡の者は断然處分せよと云つた。これ
を歴史家が大に感心してゐるが、少しも感心すべき
事ではない。才智のある人が、老中に聞かぬ
とは斯う云ふ立派な事を云ふ。實は隠録の
所立腹もあつたらう。六代が薨去の後、大奥へ
女役者が遣入つた。女許りではない。男役者も
女の装をして遣入つたから、將軍の母は月光院
殿に仲お脚島み助があつたらう。この人が七代
時は、大奥の全權を握つてゐたから、自分が常用
と思ふ役者を呼ぶ筈はない。詰り自分から役者

置し、老女、中死にも口塞ぎし之を黙許し
たつた。當世第一等の流行役者生島を
買ひ、口塞ぎ、焼餅、心を出し、松島を僧人
とし推測し、然るべき話である。太宰純一春
色に言ひ下す、利口で注行の多い夫人と云
つゝ、太宰は當時存命で居て、朝夕見聞
し、右から相違真相を知つて居やうと思ふ。

二十六歳の若後室月光院と

幼將軍の後見間部詮房

家宣薨去後、間部詮前守は幼將軍の
後見、三人は是より本丸へ泊り込んで吾屋敷
へは一切返へらぬ、前將軍存世にも、其の方の氣
に入つた女は誰よりも枕席に侍させよと云ふ持
別の怨念を世に、その太皇へは藤原同部
下、將軍が死んで見小御上孫の御守をせぬはな

いぬ、お守りには月光院への詮議を成すの由、
其時の常侍の内閣と云ふのが土佐井伴掃部
頭直詰、老中は土屋相摸守政直、秋元
但馬守喬朝、土久保加賀守忠増、井上
阿内守正岑、阿部豊後守正喬の五人に
あるが、井伴は平々凡々たる人物一向勢力
がない、土屋は七十の老人で深々しい親爺、秋
元が少し才氣はあるが、之れよりも責任を重んじて
仕事をする宰相ではない、土久保、井上、阿部
は伴食宰相下御たしくと云ふ連中を二下

大政は誰かの手で裁決するかと云ふに後見は
川守役下りの内閣蘇前守の手を待たねば
ならぬ、内閣は又大々かゝる問題と云ふと新
井白石に相談する、白石の識見と手腕は非凡で
あるから、二人を相談して先中へ話をす、平凡の
内閣いっと内閣の不言を要して大政を掌する
と云ふ次第である、正徳三年より享保元年ま
下心算の同士政は、内閣が専横の中にあつた
のである。

彼と月光院との関係はとてあつたが、續者は定

めと氣を採んで居りし事であらうが、此先に向部の
人物と異量とを疑はしむると思ふ

彼は前代述べて居るに能役者の子で身分の賤い
者であるが、七代のお守様と云う古體は、上州高崎城
主不立派な大君で六代薨去の年が五十才である。
政治上其他に於ては、わが事であつたかと思ふに大君は月
ちの坊主や人を以て老中にし居るは役に立つた。

元来有能の敏を處と、諸事公平であつた事は
確かである、白石が疑ひに寝ぬて居るのは其用にて
らぬが、この事も疑ひがある、土屋朋徳守は五代以来

承久老中を勤め後には井伊に代つて大老と云ふ
採り事に成つた、之を「奉書」加別卿免しと
云譯で老中より上席に与る。或る時土屋
が同部に通つた、大老は他の中老と見違つて下し不
知し違ふ譯であるが拙者への下し不物は、いつし
老中と目録下ある、君が吾達人の望みさへすれば、
どうにもする事だから、何とか頼むにいと土屋が
懇恨、に請求。

其の上士なまゝには上様御幼少で喜んぬ加め
老中と云ふく、箱直改す事あるか五は事には威

権が加はるる時は詰り上様は御威光がまゝ
なり譯し下は五口等はは宿直をわめ令せし威
権の加はるる様は改し白り、これに宿直の御承知を
小知給て成り事と存するがと頼りに頼りて頼り
スルト同部が各々方に威権の加はるが上様の
お爲めによきや否やは五口等はは令り兼る前代の
御遺所には覚を立て権を多事不可からずと戒の
玉ふたを御承知をあらう。次に宿直の事御
免体御苦勞千萬をかし、上様御幼少の折
を小は、是れは曲やと御勤めなされるが然るべし

何事ありても上様に代りて下知をさる、は各々方の事な
り、ニ事事七前代御在世に總御留守居役を道々へレ
り、上と云ふありたりに各々方も五口は斯に能く上は別は
總御留守居を道々へレ及か申さずと申上りし改
め方宿直をさる様にはなごし、今更ら左様御
せうきは心得難い又御物事上様に知少をたは
の取計には、貴殿の御事多くと賜けん事、いはは候
代に定めて道々へレ通り改め外はあつたきいと存
某一存に、御事様は仰せり、某一存と申せば、
代の御遺言を申し、世を欺る事、は相成るべく

左様の手紙は法王の御返り書に申すは事と一公年じ体よ
出度し希御書、註房は永位、見識を以て居た。

また、月光院が將軍の生母で非常に申が利く、御書
も月光院様へとと去ら探である處から御台所と
月光院の件に代はこすた。

「徳川實記」には天英院夫人（天代の御台所）は淑
徳を以てして隆長の御性賢なりと記し、しが實際は
よすてあるが、月光院を非常に憐んで老女以下双方管
派が立った、天英院を天英院と申す、月光院、聽聞を
類りに吹聴す、月光院派は天英院様男外優

を密に召さす、ちと、言ふ、彼、激烈になつて天英院を
老女を以て向部、斯くも事、言出しぬ。

御台様に上書上様、御養老、そき永たく思召さる
途に其本すもなく、所存にこれ、物より思召す御方
を心細くのみ渡を給ふ、就は所詮、御部（近衛家）
に帰り、行く思召す、其事、御書、申し謀りたま
はるべし、と申す、御書、あり

と申す、さうすると向部が、其事は御書、ごへ申す
述す、其まが第一に御書へ仕るべし、
當上御書、出せ、時に御台様御養老、遊りす

へきやと言ふ脚内意もあり在り上ノ思召にて世良用
と云ふ脚姓を録して鍋松探と申上る事は相成り非バ
己に他姓脚表乗りの上は脚養君しかいと云ふ脚
評議あり其時日蘇上探脚台抵脚相後遊はる
の脚事下ふも然るに今至脚養君云こと仰せり
は思召も脚志も存に事すとぞ、古へ表向き脚養
君の脚履めは事と正しく嫡母に在り上は終身お
世遊遊おすべし脚事に依りや、ま古京都へ
歸りせ給ふ脚心一向脚尤も存む脚一生の内
に面も京都へは歸り在りぬが脚婦人の道と申

しに依、左稱の思召は堅ル作ら脚婦徳見し見る
意あるべきが、よくく申上たす

と即座に返事こたつて老女の関口し三英院といつ返
才詞をく泣寂入りとすん

一面に斯と正々堂々の論をいへ至極立派な人下
るが其の表面を窺ふに少く取馬かぶりを得ず、事実は
介らぬが三王外記で見ると随分礼儀な事、同部
が上探といひ將軍の口から評議した程の権探が、
同部が上下を睨んで頸巾を冠して月笠院と炬燵へ
這入って一杯飲む居たのを七歳に及ぶ將軍が是て

同部は上孫、孫と評し、上孫と親、永宣のまゝで
第二子不文、之らより振舞をしなからずある。斯く云ふ
有孫であるから、この年に有名な繪島の淫行一件が
起つた。この時代の書に、近臣、侍臣、大奥の女中と
密通せざる者なく、毎朝掃除する人夫が庭を掃
を掃の事がある。同部に年立て、し知らぬ振りをこ
て居るまゝの宮内外の乱、前世末に有らざる處を
と云つた、世人は繪島の事のみを知つて居るが、此の
時分には繪島の外にもいくとある、大代將軍は芝増
上寺へ移つたところから大奥より参月脚代参り云つて

老女、中老下が出た云英院の代参りあり月足
院の代参りあり、法心院へ(右近の向)の代参り
出る、其時代参り日脚徒頭脚徒脚小人下り附
行く、五十人の供を連れて行くのであるが、塙上寺へは、
名代、女をやって坊主に贈答を遣ひ其儘本境
所、芝居へいつて、狂言を思つたてをない、桜敷へ
は簾を下して屏風で囲む役者、脚郎かげまをい
呼集めて酒宴をする、その後敷から座元の奥座
敷へ通し同道を遣ひ、通しを番に座元の座敷へ
後者は通しと云ふ小才法に似て居る、脚代参りく

云ふのは全くその遊樂をたゞの爲である、是らの事
は奥服御用を勤める後藤縫之助の時代や其
外大奥へ縁政を求めた山師といふが奔走して
さまざまに取持つ、幕府の役人と監禁に付てまこと
金を貰ふから他言すものはない。

大奥許りさうかと言へば諸大名の奥女も皆同じ
事で其時代には誰れ怪む者はない、不幸にして
繪島一人鎗玉に揚がらるゝ醜名を獲てたが繪島位
の事はいくとある、一々氣をとるべしは大変であつ
から繪島の事を次に書いて、見やう。

繪島事件

お茶屋の逢引き

元禄此の方江戸の風儀は極端に壊れた。家
宣公の治世になつてから、いくらか風儀が正しくなつた
採に見えよけれ共、氣は表面丈であつて、實は風儀
は目下には壊れしつゝあつたのである。

お年寄りが二人突然御座敷へ引出された。
御目附立會ひで評定所へ呼出されたのだから大奥

の騒動、世上の評判は大層な事下、今日と言へば、
實に社會の大問題といふ小程の評判であつた、其事
を「三王外記」に據て調べて見ると、繪島は年令三
十餘歳に至つて才幹のある美人であつた、月光院
夫人の御年寄で、大奥には府を並ぶ者、才小程の推
勢家と、同僚のお年寄、宮地、中老の梅山、吉川と
云ふ女房も皆繪島には屈服して居た、繪島は常事
一人で切つ廻す處から密に俳優を大奥へ引入して五郎部
屋へ数日の間泊めて置いた、其頃生島新五郎と系
のば、世上に名を知りし流行の俳優、男也、徹的の

者であつた、コレを度々大奥へ引入した、自分一人で
口都合が悪いから宮地、梅山、吉川等も初め七人の
中老へ、夫と相方の役者を呼ぶ遊ばせを、御年
寄が主唱者だから誰と異議を言ふな、繪島が必
小憚り者と言へば大奥中一人も言ひ、上まに上見ぬ
繪島の勢で流行を繼にして居た。

また月光院夫人は繪島の主人であるが、是れ前
に言ふ如く、岡部越前守と密通して居たので岡部
は大奥へ泊り切りて吾屋敷へは帰らぬ、斯ふ云ふ
弱点があるから繪島以下の不行跡を知つて居た

必にめり譯にゆかぬ、上下交と不行跡のあらん限り
を盡して居下、もし此後に八代將軍吉宗と云ふ
英主が出なかつたら幕府は内部より瓦解しな
し知小ぬ、保し大奥の事はいつの時代下し裏面
は暗黒である。八代吉宗の如きも艶聞をま
にあらずながら不思議な事なれば、それは跡のお話
とて、さて絵島の失行がどうして経路に及んだか
誰かこの非行を記して軋彈する程の英断をし
たか、其事実は左の通り近代嚴神録に及
る。

正月十一日 幸三軒絵島、宮地、外に中老七人、
下世共に五十人許り御廣敷番の侍衆、孫
番四五人供をして前代(文明院)の御廟所芝
山内へ御代参りして御城を出て直ちに木挽町の
芝居へ参り絵島がわらひぬきにする生島
新五郎外七八人の役者を呼び、初めは接敷に
て酒宴をなら、後茶屋へ作らて夜に入
りて遊む所水は、飯の頃已に夜も更けたり、一同
大に酔ひたれど、いづれ門番に金を興へて何の障
りもなく、大奥へ歸る事なれど、此日その通り恙

よく飯小の事ヤシと氣支をと思はれに唇の
中に添着る者も給島へ金の無心ををねるに、
酒に酔つた給島、帝にまゝ立腹して添着るを
罵りたれば大に怒心、一人世の中は立歸り、お座
敷着る組頭に、今日は増上寺へは御参詣
なく木挽町にて終日の御遊興をうと申立こた
組頭も痛か女振をいふ事を給かさうといはし
た處へ、御月附巡り来りて、何事をも申すや
と問ふ、添着る箇様々々の次第に候と申
立こると御月附の事をあるから聞指にもまぢ

其夜は左中秋元但馬守喬朝が初通し
て居たかう通ひ申立になる、秋元も月附より
申立右事故是れ改し方なく、先づ月光
院様へ伺、右上下をくは手の下、様こそと問部
紙前事を呼出し、御年寄給島以下の者
箇様々々の次第いかい候べきやと伺ひ出た、
問部は直に月光院殿と相談して、嚴重に
御取調せよべしと答へる、此に於て、秋元も
月附に逢ひ、給島の帰りを待て廣敷にて
取押へ直に親類へ演せらる云々、

二小は事實に相違ないが、繪島は何の氣も仕
かた夜に入て帰ると脚門が閉めてあつていつと
しは違つて通行を許さず、月夜院様へ申立て
貰つて一同脚門を入り、脚廣敷を上り吾部屋へ
入りうとした時、脚留守辰と廣敷番頭より一同呼
止められ、ソコへ老女が来て、脚惣然（おんぜん）には思召さ
る小と御年寄（おんねい）より申立の次第もあらは、
表方吟味仰仕らん候と言渡り、直ぐ衣類を
脱がせ、鯨の着物をきせて、脚目附の扇使より
業を呼出して置、右親類へ隠せらんといふと去る、

又一説には脚留守居松前守豆守が申渡し
九人の女に小袖一枚宛着せ直ぐ棄物にのせて
親類へ送るとある、後の方が事實であらう。

繪島が遊んだのは芝居ばかりではない、吉原の
娘樓にも度々登樓し、封巾間を呼んで、二小等の
者とも密通し、江戸の料理店の中、重立った家
へは度々行つて高永遊をした。夫小等の事も白
状も小は皆達數系、ちやうど脚及揃になつのは勿論な
あるから、江戸市中は、三小が爲めに大恐慌を引き
起したのである、繪島が関係した男數十人と外記

に書いてある。随分いい女であるが、室女其の頃の奥女中には珍ら、からぬ事であるから絵島一人のみ賣めるは其の旨を得たと言ひしぬ、彼女は奥女中の代表として處令されたと云つてより遂に生島新五郎は打首、絵島は、月見院より秋元へ内々のお頼みと云ふ事になつて死罪一筆を減に駿河守へ永徳けと云ふ事は、其の連累の者も夫々處令され、社会には曝露された大奥の大事件も暫く落着いたのである。

白井主計と奥女中山吹の戀

此頃、小普請組士に白井主計と云ふものが居た。名うこの遊蕩鬼であつたが、先祖武勲の御蔭で八百石を領して居た。

性来美貌の持主で、酒色に身を持ちこぼした。主計を初にして、両親に別ル叔父白井甚兵衛の手で成長したのである。彼の伯母は浦尾と云ふ御台所附のお陣女中であつた。伯母のとりなして、彼は總

御入着入仰せつけらる一犬出せをいたが、台息りしの
とこ小善請組へ遊せられたが、ニホと云ふ職なまを奪
取りて、酒色に耽り、武器の類迄賣り拂、て
酒色の豊にかへ、公承には公承一人の道と事が出来
ず、あやしの女と同棲してゐた。この頃浦尾龍下
の御女中は、名を山吹と称ふをやめが居た。

浦尾は山吹がいつかは公の如目にとまるとあきら
と白おしんでゐた所が、山吹は浦尾の眼を忍んで
美男の白井主計と不義の契りをして結んで仕舞つた。
山吹は遠く壞胎し袖に白おしのかんせぬ程に育つた。

浦尾は大きに驚き、山吹を嚴しくせめて見
と、

主計さまと

と、かすかに竹倉へ泣き伏して仕舞つた。浦尾は此の
事か露顯しは一大事と、奥医師に人金を與へ
て、山吹に薬を與へ、階上船せしめて仕舞つた。
大奥の風儀は斯くも紊亂してゐたのである。

大奥と御用商人

家宣公は、世人から泰照宮の同生よと謳歌され下名將軍であつたが、しかも、猶大奥女流の言はれまはすことが多かつた、公は慎重に事を處する性質があつたので、表向き死中方より申上る事のみでは安心が出来ず、事毎に表面の觀察を要された。初めは、大奥女流の言を多分に御き、にやうつかりであつたが、理想通りには行かず、遂には大奥女流の言に耳はさる、

に至つたのである、大奥へ日々出入する奥服所（御召服を扱つた地蔵を相違する）は、もと三人に限られてゐたのであるが、元禄將軍の時より、此の出入の御用商人の数が多くなつたのである。何方にも賄賂を行つた世の中であつたから、大奥女中に巧みに手づかすを求めて、御用達を仰せつけらるゝものが多くなつたのである、各御用達は疑つて女中衆へ賄賂を贈り、女中衆の宿下りの時は、其を見物し御馳走し、其上箱元へは潮肴、菓子、金銀の類を贈ると云ふありさまであつた。又即代夫といふ寺社へ参詣に行く女中衆は、帰りに途に料理屋に招いて、煮魚食

と稱して酒肴を振舞ふことが慣例となつて、それが奥女
中の風儀を乱す因となつたのである。

八代將軍吉宗の大奥

月光院と吉宗は如何

吉宗が世子保の初め非常の大節約を行った時
六代文明院の御臺所の經費を半減して、其外大
奥の經費も半減、將軍自身の經費は半分以下
まで切下げて、先中初めを警まかすの所のみが独り
月支院尼公の經費はせしと減せず、六代七代の

時と同格の予算下支出した、一不なといふお小譯で
あるが、實に大疑團である、或説には吉宗が將軍
に任じたのは月支院と御部並前守の主唱である、
大御台所が松平清武を推挙したのに反對した
結果で畢竟月支院の御蔭であるから経費へ手
をつけぬのであらうと云ふが、此もたゞうでたのみ、
續三王外記に、徳王（吉宗の事）入て統を承
徳王亦正焉と書いた吉宗は月支院と密に親
密の交りを行はうとい、外記の記す所果しと事實
かどうか分らぬが、月支院の経費に少しし手を

付けぬるを見れば少々怪しくなる、この時月支院は
三十歳、吉宗は三十三歳、この判断は讀者に任
せようよ外けまい

吉宗手代の妻を所望す

將軍の家の内室には、世人が一向知らぬ奇談があ
る、將軍の大奥の女中の内この女中と思はれた時、
老女に名を聞くのだ、其小は何と云ふのかと聞か

多を爲事せしむる。吉宗が一日入浴した時、浴
室の上の間の次に二十二三の女が居たからと見ると
美人であつたから老女に尋ねた、お尋ねがあるは、
最早や思ひは分つてゐる、早速老女が其の女
を呼んで、其方は果報のぢや上様の御目に止
つたから左様心得るやうにと言ふ申渡して其の夜
早速お伽に出す手續をすると此の女が承知し
た、私は夫のある身でござります、たとへ上様の仰
せにこそ此の事許りはお受け出来ませぬとキツ
ハリ断つた、老女は意外に思つた、亭主が

あらうがなからうが上の思ひに此月くと云ふは、言
語同断の次第と云ふ権は命で談いつけたが一
向に聞入小をい、其小から老女が夫の名を言ふと
園楽御代、伊奈半左衛門の手代下某と申
すもの、小身の者が家計立難く余義なく御
奉公に出たと云ふ、そこで勘定奉行支配の
伊奈半左衛門下あるから勘定奉行より伊奈
へ内談して伊奈より手代へ諭して女房を商縁
たす事にして、何事も御爲助である、高縁すれば
忠義と立つ小けであると説諭したから其の男も余

儀すく高縁状を言つて伊奈へ差出した。此に於
て伊奈より勅定奉行へ送り、老女の手へ渡りて
本人に渡し、此の上は上の思召しに従ふて有うと
言つた處が、いふて夫に一度逢せて要小夫の口
から一言高縁すると言ふ小物は女の道が立たぬと
言出した。老女また困つた、將軍へお声の掛
けた女を亭主に送らせ、譯にはゆかぬ、即成より
出す譯にはまゝ承り、ゆかぬ事、小物は御座敷番
の役人の種々相談した上、老女が雜司右衛門
夫人へお声の掛ける事にして、其の女を伴つて雜司

右衛門の茶亭で其の夫に會せられた、老女が嚴重に
見張をして居る傍へ、奇付おに會せられた、夫婦
泣く泣く袂別の情をのべて、此の高縁問題は決
したのである。

この女は遂に一人の母子を産まない、其の後、吉宗
が鷹野に出で小菅邊を福祥した時、伊奈半
左衛門が道の傍へ出て平伏して居ると吉宗立止り
「某は息災に奉公いたし居るか、目を掛けてや小よ
と一言いひ、半左衛門畏り奉りて、上の御声が
掛つた上は捨置けな、直に勅定奉行へ申出

二百石の興力に、二小は女房のお蔭である

十一代將軍家齊の大奥

諸藩士風の墮落

家齊の時代武士の士氣沈滞し、風儀の頹廢は極度に達した。帝は江戸に下を遣はす。特殊の地方を除いて全國的の現象であつた。刀の身を竹質に入れ、竹身の刀をさして、僅かに威嚴を繕ふ腰拔武士が多かつた。江戸の諸藩即在住の武士は武道を志して、酒色に耽つたのである。

遠州浜松城主井上河内守は、名うての好色家であつた。嘗て在番の折、本庄方面へ鷹島狩りに出かけた。道すがらさる人の下屋敷に、屋敷守の家一軒あつて、他に人家のまゝに置つて廢々とした物靜がな所へ出た。河内守は、供の者をまたせて、唯一人この一軒家を訪れた。折節、夫は不在で、妻一人を着して居た。河内守は、艶なる女の姿を見て、淫心ムラムラと起り、女をとらへて、「我に従へ」と云ふ。女が従はぬので、腰の刀をぬいて殺すべしと脅かして押し倒して之を犯さんとした。この折節、夫婦

宅し、このていを見ても大きに怒り、河内守を先きで飛び出した。この騒ぎにおいゝいて近習の者はせまり、河内守をまためて其場は兎に角おさまつた。話かばつて其男は河内守の狼藉に憤慨し、公儀へ、

我ら留守中に河内守参らる、我が妻を姦せんとし、我ら其折節かへりぬる故之を咎めしに、却て我に刃向ひ、かく手疵を負はした。

と訴へ出た。公儀にても、大名が他所にて、人

の妻を強姦せんとせしは前代未聞なり」とうち
驚き、井上河内を奥州棚倉へ所替へりして
しまつた。河内守に類する色情狂の大名は
多かつたのである。何しろ、お大名の中には忍
び忍びに吉原へ女郎買に出かけるものがあつた時
代であつたから。

墮胎流行時代—僧の墮胎落—

此の時代、所謂大御所時代大奥の風儀は、元
禄時代と同じやうに壊れした。奥女中は大奥出
入の商人と所もあらうに大奥で密會をする、或は
宿下り、林して市中に出で芝居の役者を買つたり
か、か、買つたりして、性慾をほぐし、い、ま、に、してゐた。
其の結果奥女中不懐妊するものが頻々である。
奥医師は、いつも奥女中の墮胎を助けるといふや

うな有様で、風俗の紊乱は到底筆紙にあらはせぬ程であった。

旗本の風儀もわるく、お旗本にして妻を貯へぬものは無いし、女小ありさまで心ある人々は、妻に子供の出來るのを恐れて、いろいろの遊姪法を試みた。之は一面から見れば、今日流行の五生児調節である、昔時の匠與子は、墮胎術が比較的に普及してゐた。此時代には殆んど全国的に墮胎が流行した。

此時分、衆生を濟度せぬばならぬ僧侶の品

行は極度に墮落した。

天王寺南の一に寺の住職は遠金屋みつと女小茶屋女を妾とし、自分も又茶屋を出して遊蕩費をつつてゐた。この坊主の甘言にのせられて、貞操を破らぬ婦人の数は二十数人に及んだ。

寺内の茶屋、其嫁を幼少の頃他家へ養女にやつたが、生長の後取かへさうと思つた。けれども先方は承知しなかつた。一に寺の住職はこの話を聞くと

俺が萬事引うけた

とて先方へ交渉した。先方でも出家に免じてかへしてよこした。一心寺は、この娘を娶として、貴家へ帰さまかつた。

曼陀羅院の住職は、或る富家の娘を娶し其の間に出来た娘に鳥屋下管まさせた。出家の身分を生類を商ひするとは言法同断である。北野善通寺の坊主は、寺の貸家の差配人の妻と姦通し、其の夫を毒殺した。其上檀家の婦人や令嬢をたぶらかして金を捲き上げ、散々に其貞操を弄んだ。不埒極まる破戒僧である。

ある。

長持の中に大奥の女中

家永月は、天保八年四月二日、西元へ移り大御所様となりたまし、愈々贅澤放題の日を送った。西元大奥は、お美代の方の勢力範囲となつた。

かの嵐山の威應寺へは、大奥から女中が、代り代りに御代矢多をする。タメ勢力の奥女中が駕籠に

乗て推司ヶ谷通ひありきまは、當時江戸の花と唄はれた、そして前代赤圍の風俗壞亂が、神聖なるべき不寺の中で行はれたのである。古く和の頃、延命院日道が、市川男女藏、山井糸三郎などお小男役者を寺へ招いて、大奥女中の色慾を満足せしめ、其上日道自身が大奥女中の情を通じたる事が察覺して死罪に落ちた事があつた。感應寺の風儀額原はこれ以上であつた。

感應寺日啓は、寺僧に美男子を求め、大奥女中を招待し、形式の新禱終れば、株間へ送るく

と云ふ乱痴氣騒ぎを演じた。お寺は、夫で待合であつたかゝり。

こゝに不思議な事は、長持が感應院へしばらく運ばれたことであつた。勿論名目は、「衣服其他調度品を新禱して貰ふ」と云ふにあつたのである。これに目をつけたのは、坊主退治の名人西丸の老中堀坂作勢であつた。

或る時彼は、大目附をして長持の内装を検査させた所、

盛装した生きた奥女中

があらげられたので一驚した。これは奥女中が長持の中へ入って感應寺へ行き、不義の袂袋に耽ら人が為りであった。首甲村大吉は、長持の中にひそんで、尾州家の大奥へ通ったと云ふが、此れは男、感應寺行の長持の中には盛った女が入つてゐた。

この生き人形一件が暴露した爲りに、老女頭瀬山は、天保十一年六月に永の御殿とされた。他の一切は奥向の事であるから其儘にすまして置いた。

この後七ツ口と云はれた、奥女中の出入口には、天秤が置かれ、出入の長持は一々重量を検査するこ

とになつた。けれども、大奥の風儀は到底改まりはしなかつた。

雜編

將軍の服装

或る人は將軍は黒地に鼠の縞ある縮緬の上着を着て、下着は八丈縞に限つて居たと云ひ、又幕府麻故事録には「公方様御不断召は八丈縞まり八丈は島よりの御年貢物まり云々とあり、御衣具は八丈或は三端がけで、右大將様の御召は丹後縞、

田舎様は郡内縞 皆縞物をお召し遊出され、三竹助立の横留の御袴に御肩衣は羅（うすね）にさらうちを、したるものあり、又御懸上下は麻との同の時は、茶色丁の御上下まり、玄緒の出御は藍色の御小袖に黒の御羽織まり云々しとまわつてある。然し斯く八丈のみを着たのは、昔時、有徳公が節儉を主とせしに墮に限り、故事誣は其の時、事下あつた、實政度儉約の節又は水野御前が節儉の政治實行の折には、縮緬の上着に八丈の下着と、大躰極つてみたが、其他は總じて御召服と云へば、黒羽二重、黒

縮緬ハ紋付ヲ着るガ例也、裏ハ茶羽二重、浅黄羽
二重ノ二種ト定リ居リ、下着ハ先ガ八丈也、又單
物ハ縮緬ハ丈多ク、羽二重トあり、縞緋ハ
黄納を用いた、帷子は越前縮ト限リ、帯は博多
の「トッコ」を用い、色柄は御納戸、紺挾帯、貝
の口ト云ふ結方は町人の帯であつた、下の帯は白
羽二重、隻々襦袢は白麻を用ひ、疋袋は本棉で
絹ボタンが付き、羽織は着用しなかつた。

若林某の日記に米國の水師提督の初めて来た
時、將軍は夕方から夜の八ツ頃まで御座の間で

着座、御前に老中詰め切つた事があった、此時將
軍は獨角衣を脱がなかつたから、御小姓頭取から
最早八ツの時計は鳴つたから羽織を着る様言つ
た事もあるから、矢張羽織を着用したからと疑
ふものもある、成程羽織を着ないことはなかつた
らうが、羽織は元野服であつた中での召物では
ない、寒い時には黒縮緬の縮入羽織を着た
り、夏更に羽織を着た事もある。

十月初五日、玄徳の出脚は申中列諸大名、野
井目長上下で登城し、將軍は紫裏の小袖、下は

白長袴を着て、此日白書院上段に着座すとの
あつた。又平常の肩衣は、唐呂の黒、空色、百紗
茶の採を色合のものを着て、袴は總て茶葉を
用ひ、袴のみを用ふ事は決してなかつた。
然し平常は白衣の儘であつたのである。

大奥女中の服装

大奥女中は縮子のかじり襦を着る、是は御目見以上で
上臈、お年寄、中年寄、中臈、お客會釋、御

錠口詰、表便、御次頭、御祐筆頭、御錠口衆、吳
服の向、お次、御祐筆、御慶敷、お三の向これだけに
限る。襦、地色は黒、白、赤にて金銀、五色の糸
等にて、源氏車、菊、梅を採々の模様を極く細
密に縫つたもの、向あき着は紋縮緬の紅、水淡黄、萌
黄等さまざまあり、下は白羽二重を重ねて着る、縮子
を着る者もある。帯は大かに縮子にて是れ縫ひある。
この中御三の向は帯には鶴を着る、襦を着用するの
は正月三十日に限る、髪はいろいろかゝるに、三十日はお年
寄、中臈はお長とある詰ひ乃其下はお下げ下、この

字通りすの採らる。

少年 家重の好色

家重は子供の時から女に關係の多い人で、十三の
年に侍女に手をつけ初めて、西丸へ移つてからは、始末
にきつぬ程の好色、俗に云ふ「ほろツ買」と云ふ性
のよくよい好色ム成で、自分か手元近く召使ひ女に

關係をつけた者が、沢山ある、大宰春台が「太子
少ふして内山籠多し」と言はのは事實である、十
七才の時、顔色次第に青くやつた、飲食良し常
の通りでない、侍医が心配して是は房事過度
のためであると評議して内々老中松平左近將監
兼色まで申立た、この人は、伴食宰相ではない、
吉金小に知られて信任される程の人物であるから、ソレ
は春日御殿の事である、將軍へ密山に言上し及ん
だ。吉金小に心配して、奥にのみ引籠めて女共相手
に改し居る故、病身にも相成る、武將は武藝を、放

鷹等に身を習はして体を強壯に改さねば相まらず
武藝の精日あるをさせ鷹野へも出る様にしたせよ、千住
の在所に小笠原と云ふ地あり、彼の地へ休息所を設け
大納言(家重)を泊り掛けに遣はし數日滞在させ
せて成るべく女どもを近りぬ様に取計ふべしとの
上意だ、兼色承って早速同僚にも命を傳へ
小笠原へ御殿を建て、家重を勧め鷹野へ出し
上様の思召と言はれて五日と七月に小笠原へ止め鷹
を放させし樂ませる。併し性来斯くおまは好
まぬ人であるから家重はとては逆感心するまい

武藝の師範は柳生但馬守が命せらる、學問は
金屋鳩巢と成って居てもちうも精を入けて幽子ぶの
ではない、女上の御機嫌を損じは大変である
思ふ許りで、全く形式的で暇を偷んでは奥へ這
入り込んて女を相手にかうしのよい遊をする。斯
様の有様を見ても平凡の老婢といふ敢て諫言す
る者もなかつた。

吉田御殿

「吉田通水は二階から招ぐ、しかも鹿の子の振袖で」と云ふ歌は當時流行つたと云ふが、いふに五右衛門には分らざらう。吉田通水はと云ふは三河の吉田に飯盛女のみさしうが居て、旅人を招ひたと云ふ話がある。ソレを天樹院どの、事に引付け言傳へたと云ふ説もある。其實際往來を通る若い男を吉田御殿へ引摺込で散々慰めんを揚句殺してつ

た其事を吉田女郎に取做したものと云ふ、所部伊勢守の長男も引込まれたと云ふ話をきいた隨筆もある。此後家どの多情の人、云ふ事は事實で、阿部伊勢守は若い時を至って好男子であつた爲に、その水を附け廻して女中いかに引摺りにませたと云ふ。さう云ふ事もあるらう。將軍家や姫君の事で、御寵愛第一の人、然儘は仕放題、云ふ身分だから少しも憚る處はない、誰れ新へる事は出来る、仕末にいけなう淫婦だ。

將軍は若いから聞さびれからう

家康が駿府に居る頃何か相談する要事があったて、秀忠が江戸より赴き、城内の南亭に七八日許り居た事がある。全く一人で、次の間に小姓が二人ばかり居る許り。家康お氣に入りの阿茶を呼び、將軍さまを徒然とあらう、お花をやって伽をさせたかよいとさほ小通子内命だ。そこへ阿茶の荷がお花と云ふ十七に在る腰元、これに至って美人であった。それをまた磨き上げて、美しく造り上げ

折重は菓子を入水、下女に持せ奥庭つゞきに秀忠の住下居る南亭へやった。この美人をやつたをさゆす止めて置いて伽をさせたであらうと云ふ積りである。詰り家康自分の心を以て斯く豫想したので。

處が父大御所より侍女を遣したと聞て秀忠直々上。下を着て座敷の椽側まで出迎ひ上座に通して、御上便標にはまづくあ水へと云ふ体裁だ。斯う四角四面に出られたので、お花は眞赤にきつて碌々口上も述べ得ずいひ、もぢくして居る。秀忠は御菓子を頂き有り難き仕合せ、此方より體り出で御礼申上るで御

座子とせよ返事だ。お花は、かぬて阿茶の局より内、
乙を命令て受て以心傳心下やつて来たが、相手が
大の堅藏石部金吉全由と来て居るから駄目だ。
宗々の体で帰つて其旨を阿茶に復命すと流石
の阿茶も呆れて、その通り家康に傳上げた。オウ
と家康が手を鎖にあて、「イヤ將軍の堅いには心
此入る、己小はとては叶はふい」と言つたさうだ。

秀忠の御臺所

秀忠の律義に就て書きたる序に其御臺所に就
て記さる。

織田信長の妹やお市の方と出つたのは彈正忠秀の
女で美人の聞えがあった。元龜年中兄信長の計
りで、近江の浅井長政に嫁して女の子が三人生れた。
浅井が亡かた時、柴田勝家と羽柴秀吉が競争

して此後家殿を貫ふとしたが、秀吉は二回籠手に敗
て柴田の夫人となったのである。天正十一年勝家が
滅亡の時、夫人と共に自害した。

其の時三人の娘を一挺の駕籠に乗せて、秀吉へ送っ
て養育を頼んだ。此三人の娘は大阪で成長して
姉は十三の時秀吉の妻となった、之を達君と云ふ、
次は京極宰相高次の室となって、後に本誓光院
と云ふ、末の妹は尾州大野城主佐治興九郎一
成の妻となった、之を名を達子と云ふ、秀吉と
うさふ諱か達子を取戻して丹波宰相秀勝の

内室とした。二、で女の子が一人生れ、秀勝征韓
中彼の国で病死して後家となったのを、秀吉の計りで
秀忠の夫人とした。三、か二代将軍の御台所と
仰かれ人である。

この御台所は至て嫉妬深い性で将軍を一目置か居
る位の女だから、秀忠の全佛たる所以、一面ニ、ある
ると云はれはするまい。

何れの時代に於ても歴史の裏面には、女性の交渉の

320

585

吾の時代は吾の時代、太平を謳歌した三百年の江戸幕府に
 妻妾の力が、時に天下の政治を左右した例は極めて
 多い。今更にかゝる女性の有つ力の偉大さを感じ
 る。

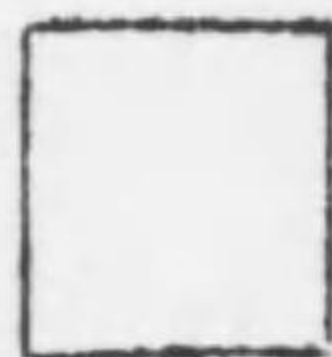
江戸閨房情史 終り
 大奥

(江戸閨房情史大奥附)

昭和四年三月二十二日印刷
 昭和四年三月二十七日発行

非賣品

編者 九 華 坊



東京市麹町区元園町一丁目四拾七番地

発行兼
 印刷人 林 元 式

発行所 東京市麹町区元園町一丁目四十七番地
 一元社書房

終